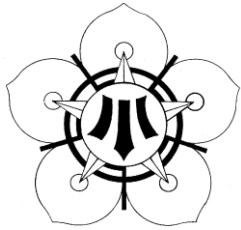


地域と家庭と学校が一つになって子供を育む…それが“チーム七小”です！



福生第七小学校ホームページ

<http://fussa-7e.hs.plala.or.jp/>

くさぶえ

福生市立福生第七小学校
令和4年度 学校だより
発行責任者
校長 山岸 史子

所在地
福生市北田園一丁目1番地1
令和4年8月29日 発行

助けを求めることのできる力

校長 山岸 史子

例年以上の暑い夏休みが明け、子どもたちの元気な声と姿が校舎いっぱいに戻ってきました。長期休み後に毎回思うことですが、学校というのは子どもたちがいてこそ生き生きと輝く場所。主役たちが戻ってきた風景に嬉しくなります。

この夏休みの期間を利用して、私たち教職員はそれぞれに様々な研修をしています。子どもたちに学ぶことの楽しさや価値を伝えていく仕事をしている者として、自分が学び続けることやそこに楽しさや意義を見出すことはとても大切なことだと思っています。

その中で、現代社会における子どもを取り巻く環境を考慮した支援の在り方について学ぶ機会も多くあります。それぞれの人がいろいろな環境や経験によって「今」がありますから、すべての人の状況を正確に理解しきることはできなくとも、子どもたちの未来を見据え指導していくにあたっての糸口を見つける助けにはなります。

子どもが巻き込まれる痛ましいニュース報道には、誰もが心を痛めていることでしょう。個人情報の問題がありますから、報道で語られる事実の奥にある真実までは、到底、私たちには知るすべもありません。しかし、自分の経験や見分によって想像して、どのようにしていたら、この悲しい出来事を回避できたのだろうと考えることはできます。そして、せめて自分の周りにいる、自分が関わる子どもたちが、笑顔で成長していけるように何ができるかを考えるのです。

そんな時思うのは、他の助けはなかったのだろうか…ということです。困っているとき、自分ではどうにもできない思いや事柄が生じたときに、不満を吐露したり相談したり、力を借りたりできる「だれか」はいなかったのか。この「だれか」は家族や親せき、友人だけではありません。近所の人、市役所など公共の機関・窓口、病院等、様々だと思えます。

「助ける」「助けてもらう」というと、何か「助ける」方が優位という関係にあるように感じてしまいがちですが、優劣などありません。「助けを必要としている」と言えることはとても大切で、そして生きるための能力が高いしるしだと私は思います。「助けて」と言いたいことや場面は、小さな事柄から切羽詰まったものまであります。しかし、自分だけで抱えて困っているのではなく、「助けてほしい」のひとは、誰かの力や視点を借りて少しでもいい方向に向かわせるための大切な第一歩となる言葉です。中には力になりたいと思っても、「手を貸そうとすると嫌がられるのでは」、「かえって迷惑になるのでは」と思い、助けられずにそわそわしている人もいるかもしれません。

「助ける」ことは代わりにしてあげることでもありません。助けを必要としている人が主体的に関わることで、両者の立場に優劣を生まないポイントではないでしょうか。

これは、子どもにも大人にも言えることです。自分で頑張るだけでは見えてこない、何か新しい可能性に出会えるきっかけにしたいものです。